

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

第十三冊

自卷廿四
至卷廿五

21096

國立第一師範學校
(附設圖書館)

分類號	18	冊
總號	320	冊

T1A1

22

Ka1

福岡教育大学蔵書

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

明治九年
一月刻成
何氏藏版

萬法精理第十三冊目次

卷之廿四 宗教ニ関涉スル原理

第一回 總論

第二回 ベール氏ノ詭論

第三回 寛裕ノ政ハ基督教ニ適應シ專制ノ政ハ

回教ニ適應スルヲ論ス

第四回 基督教及ヒ回教ノ性質ヨリ所生ノ效果

第五回 基督舊教ハ立君政ニ適應シ其ノ新教ハ

共和政ニ適應スルヲ

第六回 ベール氏ノ詭論

第七回 宗教ニ就テ完全ナル法律ヲ論ス

第八回 道義宗教ノ關係

第九回 エスセン人ヲ論ス

第十回 克欲ノ學派ヲ論ス

第十一回 參禪止觀ノヲ論ス

第十二回 懺悔苦行ノヲ論ス

第十三回 不可贖ノ罪惡ヲ論ス

第十四回 教法ノ民法ニ與フ所ノ影響如何

第十五回 民法ヲ以テ教法ノ陋劣ヲ改良スルヲ論ス

第十六回 教法ヲ以テ政治ノ缺典ヲ補正スルヲ論ス

第十七回 同上

第十八回 教法ニ民法ノ效用ヲ有セシムル所以ヲ論ス

ヲ論ス

第十九回 政府人民ノ利害ノ係ル所ハ教義ノ真偽ニ於ルヨリモ其之ヲ用井テ宜シキヲ得ルト否ラサルトニ依ルヲ論ス

ヲ論ス

ヲ論ス

第二十回 同上

第二十一回 輪廻ノ說ヲ論ス

第二十二回 教法ニテ敢テ關係ヲキヲヲ憎惡セシムルハ甚タ危險ナルヲ論ス

第二十三回 祭神ノ日ヲ論ス

第二十四回 土地ニ從テ宗教ノ適否アルヲ論ス

第二十五回 甲國ノ宗教ヲ乙國ニ移用スルノ不

利

第二十六回 同上

卷之廿五 教制及ヒ其ノ外部ニ現ル、教義ニ關涉

スル原理ヲ論ス

第一回 宗教ニ關セル人情

第二回 信教ノ心情相同シカラサルヲ論ス

第三回 寺院ヲ論ス

第四回 僧祝ノ職ヲ論ス

第五回 僧侶ノ富ニ制限ヲ加フヘキ法律ノ經界

ヲ論ス

第六回 禪院ノ論

第七回 偽義ニ惑溺スルヲ

第八回 法主ノ論

第九回 宗教ノ容忍

第十回 同上

第十一回 宗教ヲ變更スルヲ

第十二回 刑罰

第八回 西班牙葡萄牙二國ノ宗教監察司ヲ諫ム

ル文詞

第十四回 日本人カ基督教ヲ疾惡セシ所以

第十五回 傳教ノ一

萬法精理第十三冊目次終

萬法精理卷之廿四

何禮之譯

宗教ニ関涉スル原理

第一回 總論

物ヲ暗室ノ中ニ辨ス必ス其微明ナル所ニ就テ諦視ス
可シ歩ヲ險崖絶壁ニ試ム必ス其ノ稍夷カナル所ヲ撰
ミテ進行ス可シ諸宗教ノ利害ヲ論スルモ亦然リ異教
外道ト雖モ一概ニ之ヲ擯斥セス先ツ其中ヨリ社會ノ
利益ヲ増進スルニ近キヲ撰ミ若シ來世ノ安樂ヲ享ク
ヘキ因縁ナキモノハ唯タ現世ノ福祉ヲ生スヘキモノ

ヲ取ルヘシ

故ニ予ハ茲ニ宇内諸教ノ中ニ就テ其ノ人間ニ與フル
福利ノ如何ヲ論究スル所ヲラントス而ノ予カ政論者
ニシテ敢テ神道學ノ徒ニ非サルヲハ乃チ此書ヲ著撰
スルノ趣旨ニ由テ明白ナル可キヲ以テ書中立論ノ大
本ハ敢テ宗教ノ真偽ニ拘ラス專ラ世道人心ニ関涉シ
テ思想ヲ起スモノナレハ其教義ノ根蒂ヲ或ハ上天ノ
明命ニ托シ或ハ世界自然ノ理ニ歸スルカ如キ高尚微
妙ノ玄理ヲ考究スルニ在ラサルナリ
苟モ虛平ノ心ヲ以テ此書ヲ讀ム人ハ予カ真教基督教ヲ

論スルニ方テ宗教上ノ利益ヲ枉テ政治上ノ利益ニ服
從セシムルニ非サルヲハ諒知スル所ナル可シ抑モ予
カ趣意ハ必竟政教二者ノ利益ヲ共和併用スルニ外ナ
ラス之ヲ共和セント欲スルニハ必ス先ツ之ヲ識得セ
ント努力セサル可ラス

基督教ハ自他互ニ相ヒ親愛セル許多ノ國民ヲシテ
良ノ民法ヲ受用セシメ寂良ノ政法ニ沐浴セシムルヤ
疑ヲ容ル可ラス蓋シ宗教ニ亞キテ人ノ得テ受授スヘ
キ至極ノ福利ハ此二者民法ニ勝ルモノアラサレハナ

第二回 ベール氏ノ詭論

ベール氏説ヲ作シテ曰ク像教ヲ信スルハ無神説ノ徒
タルニ如カスト其意ハ蓋シ不善ナル宗教アラシヨリ
ハ寧ロ初ノヨリ宗教ナキノ却テ害鮮ナキノ如カスト
謂フニ在リ又曰ク生レテ惡人タランヨリハ初ノヨリ
我躬ノ生ヲ稟ケサランヲ欲スト此論ハ真神命注ノ人
ニ限リテ生ヲ稟ケ世ニ出ルモノト信スルモ敢テ人間
ニ至大ノ關係ヲ與ヘサレバ真神ノ存在ニ至テハ人ト
シテ之ヲ信守セサル可ラスト謂ヘルノ詭論ニ胚胎シ
タルモノナリ既ニ真神無在ノ思想アレハ直チニ人類

獨立ノ意念ヲ起シ再ヒ轉シテ真神ニ順從スルノ心ヲ
失フニ至ルハ必然ナリ○宗教ハ到底惡ヲ遏メ欲テ制
スルヲ能ハス故ニ人心ヲ約束スルノ本諦ヲ具セスト
謂フカ如キハ取ルニ足ラサルノ愚論ナリ譬ハ猶ホ
社會ニ罪人ノ絶ヘサルヲ觀テ法律ハ人ヲ約束スルモ
ノニ非スト謂フニ異ナラス夫ノ宗教ニ由テ所生ノ利
益ヲ抹殺シ去テ唯ク其弊害ノミヲ摭摭辯駁スルハ固
ヨリ論理ノ正鵠ヲ得ルト謂フ可ラス人間萬事苟クモ
其長ヲ舍テ其短ヲ揭ケハ民法ナリ立君政ナリ共和政
ナリ皆ナ弊害アルヲ免レス何ノ獨リ宗教ニ止マラン

ヤ(按)ウオルテル其他ノ論者ヲ指ス 今論者ニ一步ヲ譲リテ假リニ、宗教ヲ奉スルハ敢テ臣民ノ為メニ利益ニアラスト為スモ人法ノ作用ヲ以テ約束ヲ加フ可ラサル國君ノ為メニハ之ヲ立テ以テ其ノ心身ノ放縱ヲ制止スルノ韁轡ニ供スヘキナリ

國君ニシテ宗教ヲ好ミ且ツ畏ル、モノハ頭ヲ低レテ愛撫ノ手ヲ紙メ尾ヲ掉フテ歡慰ノ聲ニ應スル狡獪ナリ之ヲ畏レ之ヲ惡ム所ノ國君ハ咆哮跳躍シテ其身ヲ繫ケル鉄鎖ヲ噬斷セント欲スル猛獸ナリ全ク宗教ヲ奉セサルモノハ人肉ヲ寸裂シ饑渴ヲ防キ以テ天性ノ

自由ヲ逞クスル所ノ惡獸ナリ

茲ニ掲クル所ノ問題ハ宗教ヲ濫信シテ弊害ヲ被ムラ
ンヨリハ寧ロ宗教全無ノ却テ勝レルニ如カサルヲ
究知セント欲スルニ非ス只タ宗教濫信ノ弊ヲ生スル
ニ方テハ之ヲ防制スルノ策略如何ヲ究知シ併セテ人
心ヲ約束シテ惡業ヲ未萌ニ遏止スルハ宗教ヲ舍テ他
ニ其術無キヲ究知セント欲スルニ在リ
蓋シ無神ノ説ハ寒心スヘキ大害ヲ醸スカ故ニ論者ハ
之ヲ滅殺セント欲シテ遂ニ口ヲ極メテ像教ヲ排撃セ
リ此輩カ古人ノ惡魔ヲ敬畏シテ祭祠ヲ建タル事蹟ヲ

援キテ其ノ不善ニ與シ惡念ヲ抱ケルノ憑據トスルハ當時ノ實情ヲ得サルモノナリ其古人カ之ヲ敬畏セシハ適マ以テソノ之ヲ嫌惡セシ確證ヲ見ルニ足レリ何トナレハ希臘人カ畏懼ノ神ヲ祭祀セシハ戰場ニ赴キ劍光箭林ノ下ニ在テ畏懼ノ念其心ヲ纏絡セサランテ祈禱セシモノニシテ此國民ハ勇武ヲ尚ヒテ種々ノ神明ヲ尊信シタルヲ以テ或ハ人ニ惡念ヲ與ヘサランテ祈ル所アリ或ハ神力ニ頼テ惡念ノ遠離ヲ願フ所アリ決シテ惡魔ヲ愛シテ之ニ事ヘシニ非サルナリ

第三回 寛裕ノ政ハ基督教ニ適應シ專制ノ政ハ

回教ニ適應スルヲ論ス

基督教ハ決シテ專制無二ノ政府ニ相容レラレス其經典ノ主義專ハラ温順寛和ノ諸徳ヲ脩ムルヲ勸諭スルニ在ルヲ以テ夫ノ擅マ、ニ臣民ヲ殺戮シ殘酷極マリナキ國君ノ惡行ト並立ス可ラサルナリ基督教ハ一夫ニシテ數婦ヲ娶ルヲ許サルカ故ニ之ヲ奉スル國君ハ稍臣民ニ接シ世事ヲ通知シ從テ自ラ事理人情ヲ解スルヲ深切ナレハ克ク法律ヲ服膺シ以テ一己ノ喜怒ヲ制シ放縱ノ行為ノ戒ムヘキヲ識得セリ

四教ノ諸國ハ君臣相ヒ互ニ殘殺シテ一時モ寧所ニ違
アラサルニ方リ我カ基督教ヲ奉スル邦土ヲ回顧スレ
ハ教義能ク國君ノ卑怯心ヲ醫治シ殘忍刻薄ノ情ヲ輕
減シテ交君臣上下ノ信義ヲ堅固ニスルモノアリ夫レ
唯タ未來ノ安樂ヲ希フキ宗教ニシテ現世ノ祥福ヲ
増進スルノ功德ヲ具スルヲ斯ノ如クナル之ヲ至善ノ
宗教ト謂ハサルヲ得ンヤ
封域ノ廣大ナルニ因ラス季候ノ炎熱ナルニ拘ハラス
亞弗利加ノ中部エトピヤノ地方ナル絶域僻壤ニ專制
邦ヲ創立セシムルヲ無ク泰西ノ法律風俗ヲ移植セシ

ハ全ク基督教ノ作用ニ依頼シテ然リ

エトピヤノ王位ヲ嗣ガモノハ一國ニ君臨シテ臣民ヲ
親愛シ臣民ハ亦タ國君ニ順從シテ相背カス其風俗人
情ノ敦厚純美ナルヲ斯ノ如シ而ノ此福地ヲ距ル未タ
遠カラサルヒンナルノ如キハ四教ヲ奉スルノ國ニシ
テ王殂スレハ則チ權官大臣直チニ諸王子ヲ幽閉シ王
位ニ即クモノ、為ソニ謀リテ之ヲ殺害スルト云ヘリ
眼ヲ東西ノ歴史ニ放テ能ク之ヲ觀ヨ一方ニ於テハ希
臘羅馬ノ帝王將帥ハ甲仆レ乙起キ交腕力ヲ恃テ相殘
殺シ一方ニ於テハ夫ノ亞細亞ヲ蹂躪シタル帖木兒百

虞成吉思可汗元太祖ハ城ヲ破リ人ヲ屠ルヲ以テ英傑ノ事業ト為センニ非スヤ然ルニ輓近我カ泰西基督教ノ民ニ於テハ政規典則アリテ施治ノ要ヲ立テ萬國公法アリテ戰時ノ約規ヲ定メ生靈ヲシテ無量ノ福澤ニ沐浴セシム是レ皆ナ宗教ノ賜ト謂サルヲ得ンヤ我カ泰西人戰ニ勝テ他國ヲ滅スヲアルモ苟クモ心ニ一点ノ公義ヲ存シテ敢テ私欲ニ蔽ハレサルモノハ亡國ノ民ヲシテ依然其性命財産及ビ固有ノ法律宗教ノ自由ヲ受用セシメテ毫モ褫奪スルヲ無シ是レ萬國公法ノ主義ヲ體認シテ然ル所ナリ

今日歐羅巴ノ形勢タルヤ軍人士民各其業務ニ安堵シテ相軋ラス絶テ羅馬ノ綱紀紊亂シテ武人權ヲ弄シテ政ヲ專ラニセシ時世ノ如ク軍國ノ間互ニ雌雄ヲ爭フテ國柄ヲ掌握セント欲シ人民ニ對シテハ城邑ヲ劫掠シ土地ヲ侵奪スルノ慘狀アルヲ看サルナリ宗教ノ人心ヲ感化スルニ非スシテ何ソ茲ニ到ルヲ得ンヤ

第四回 基督教及ビ回教ノ性質ヨリ所生ノ效果
基督教及ビ回教ノ性質ニ就テハ一目ノ下直チニ之ヲ取舍ヲ決シ得可シ何ソ更ニ審察熟考スルヲ要センヤ何トナレハ教義ノ真偽ヲ問ハス唯タ其人心風俗ヲ溫

和ナフシムルヤ否ヤヲ証明スルハ固ヨリ難事ニ非サルヲ以テナリ

人生ノ不幸ハ勝國ノ威ニ仗リテ宗教ヲ強布セラルハヨリ大ナルハ无シ然ルニ回教ノ如キハ當初劍光ヲ以テ之ヲ亡國ノ人ニ施シタルカ故ニ今日ニ至ルモ尚ハ人心ニ殺伐ノ氣ヲ存スルヲ免レス

埃及中畜牧ノ部落サツバコー王ノ紀傳ハ實ニ尋常ノ

觀ヲ為ス可ラス一タテ部落ノ名ノ守護神其夢ニ出現

シテ命スルニ埃及ノ衆僧ヲ鑿殺スルヲ以テセリ王以テ為ラク「神」予ニ平日ノ神意ニ相反シタル事ヲ命スルハ

全ク予カ王位ニ在ルヲ喜ハサルノ故ナリト斷然位ヲ遷レテエトビヤニ退隱セリ

第五回 基督舊教ハ立君政ニ適應シ其ノ新教ハ共和政ニ適應スルヲ

宗教一國ニ進入シテ斯ニ地歩ヲ占ムルニ至ルニハ必ス既立ノ政體ニ適應シテ彼此交和ノ勢アルニ由ルヲ常ナリトス何トナレハ之ヲ接受スル人モ之ヲ接受セシムルノ原因トナル人モソノ國家民人ノ為メニ謀慮スル所ノ目的ハ已カ生育セシ邦土ノ形勢ニ外ナラサレバナリ

今ヲ距ル二百年前不幸ニシテ基督教分裂ノ禍ニ逢フ
 テ舊教新教ノ二派起リ北地ノ民ハ新教ニ歸依シ南部
 ノ人ハ依然舊教ヲ固守セリ
 地勢ノ南北ニ偏スルニ因テ宗教ニ新舊ノ別ヲ生シテ
 一和マサル所以ハ其理知リ難キニ非ス抑モ過去、將來、
 自由ノ精神ヲ保チテ長ク不羈ノ人タランコトヲ欲スル
 ハ北地ノ民情ニシテ之ヲ南部ノ人ニ觀ル可ラス故ニ
 上ニ現世ノ教主ヲ戴カサル所ノ宗教（按新教ヲ指ス）ハ能ク其
 風土人情ニ適應スルナリ
 新教ヲ奉スル邦土ニ於テ宗教ノ改革ヲ行フニハ必ス

其ノ政體ノ異同ニ依テ其ノ制規ヲ殊ニセサル可ラス
 路陽ハ大國ノ君ヲ護法主ト賴ミテ新クニ一派ヲ開キ
 シモノナルカ故ニ教主ヲ推戴セサルノ宗規ヲ設立シ
 能ハサルモカルフヤハ共和政ニ生育シタル人民若
 シハ立君政ノ賤民ノ為メニ宗教ヲ宣布セシテ以テ都
 テ官階儀式等ヲ省略セリ
 カルフヤハ派ハ專ラ耶蘇ノ訓戒ヲ遵奉シ路陽派ハ聖
 徒ノ行跡ニ基キテ法要ヲ定メタリ此二派ハ新教中ノ
 大醇ノモノト謂フヘシ

第六回 ベール氏ノ詭論

ベール氏ハロヲ極メテ諸教ヲ罵リ尚ホ以テ足レリト
 セス終ニ我基督教ヲモ攻撃シテ乃チ此ノ宗教ヲ信ス
 ルノ人民ハ政府ヲ建立シテ之ヲ永久ニ維持シ能ハス
 トマテ放言スルニ至レリ何ノ其言ノ妄謬ナルヤ抑モ
 此教ヲ奉スル國民ノ如キハ人倫ノ義務ニ明カニシテ
 之ヲ履行セント欲スルノ心情甚タ熱切ナルヨリ其ノ
 一國ノ獨立ヲ保護スヘキ天賦ノ權利ヲ覺悟スルモ亦
 タ從テ完全ナラサルハ無シ而メ宗教ニ感服スルノ心
 情一層ノ深キヲ加フレハ國家ニ奉効セントスルノ義
 氣モ亦タ一層ノ厚キヲ増スヲ見ル可キナリ之ヲ要ス

ルニ基督教ノ主義深ク肺肝ニ銘刻シテ磨滅ス可ラサ
 ルニ至レハ其作用ノ強盛ナルヲ決シテ夫ノ立君政ノ
 偽譽共和政ノ人徳專制政ノ畏懼ノ比類ニアラサルヤ
 明カナリ

ベール氏ノ如キ大家ニシテ基督教ヲ設立スルノ政略
 ト基督ノ教義トノ區別ヲ立ツルヲ能ハスシテ宗教ノ
 精神ヲ知ラサルノ譏ヲ招クニ至ルハ奇異ト謂サル可
 ラス夫ノ制法者カ時トシテ人民ニ教諭ヲ與フルヲ
 ルヲ見サルヤ是レ法律ヲ制定シ能ハサルニ非ス教諭
 ト法律トハ全ク別物ニシテ教諭ヲ施スヘキニ方テ法

律ヲ制定スルハ即チ法律ノ精神ニ乖戾スルヲ知レハナリ

第七回 宗教ニ就テ完全ナル法律ヲ論ス

人法ハ人ノ志向ヲ示スカ為メノ治具ナレハ當サニ命令以テ之ニ從ハシム可シ教誡以テ之ヲ勸ム可ラス之ニ反シテ宗教ハ心意ヲ感化ス可キモノナレハ專ラ教誡ヲ施ス可シ命令ヲ用フ可ラス

譬ヘハ事物ノ規則ヲ設クルニ方テ善ヲ要スルニ止マラス必ス至善ノ域ニ至ランヲ期シ又正義ノ所在ヲ示スニ止マラス必ス大成無瑕ノ點ニ達スルヲ望ムカ

如キ場合ニ在テハ宜ク教誡ノ方便ニ由ルヘシ決シテ法律ノ作用ヲ恃ム可ラス是レ事物ノ完全ナルハ之ヲ普通ノ事一般ノ人ニ求ムヘキノ因縁アラサレハナリ加之若シ法律ヲ以テ教誡ヲ施スヘキノ諸事ニ用ウルハ人民ヲシテ之ヲ遵奉セシムルカ為メニ故ラニ許多ノ規律ヲ制定セサル可ラサルモノアリ試ニ法律ニ仗テ基督ノ教規ニテ制止セル僧侶蓄妻ノヲ施行セシノヨ、數万ノ僧侶ヲシテ皆ナ之ヲ遵奉シテ一モ犯禁ノモノ無カラシメント欲スルニハ朝ニ一法ヲ制シ夕ニ一律ヲ立ルモ尚ホ其違ナキニ苦シム可シ故ニ唯タ

事物ノ完全ノミヲ希圖シ法律ノ作用ニ籍リテ以テ教誠ヲ用フヘキモノヲモ命令セント欲スルハ制法者自ラ其煩勞ニ堪ヘサルノミナラス終ニ人民ノ疲弊ヲ招クニ至ルヲ必然ナリ

第八回 道義宗教ノ關係

苟モ人ヲ誠忠實義ニ導クモノハ偽教ナリト雖モ之ニ賴テ世道ヲ維持セサルモノアリ故ニ若シ不幸ニシテ真神ノ指示サル宗教ヲ奉セサル邦土ニ於テハ必ス之ヲシテ道義ニ乖戾セシメサルヲ緊要ナリトス
ペグー人ノ信奉セル宗教ノ大要ハ人ヲ殺ス勿レ、竊盜

スル勿レ、不淨ヲ避ケヨ、敢テ隣人ヲ妨害セサルノミナラスカヲ竭シテ之ニ善行ヲ施セヨノ數條ニ過キス此住民ハ苟クモ此訓誡ヲ守テ懈ラサレハ其ノ宗教ノ如何ニ拘ラス正覺ノ彼岸ニ達スルヲ難ラスト確信セルヲ以テ土地貧困人民傲慢ナルモ其品行頗ル溫良ニシテ能ク不幸ノ人ヲ憐レムノ美德ヲ顯セリ

第九回 エスセン人ヲ論ス

エスセン人ハ誠義ヲ人ニ盡シ妨害ヲ人ニ為サス何等ノ事情アルモ天下ニ信義ヲ失セス人ニ交ルニ謙遜ヲ旨トシ信實ニ與ミシ以テ一切非理ノ利ヲ避クハシト

誓願セリ

第十四 克欲ノ學派ヲ論ス

往昔數派ノ哲學アリテ各其道ヲ講シタルハ即チ一
種ノ宗教ナリ而ノ其主義最モ能ク物理人心ニ吻合シ
テ善人ヲ陶冶スルノ功用アリシハ克情ノ一派ヲ以テ
殊ニ然リトス若シ予ヲシテ一瞬時ニテモ基督正教ノ
信徒ニ非サルノ念頭ヲ起サシメハ予ハ必スゼノ一
學派ノ學派ノ滅絶ヲ將テ人類ノ受得タル一大不幸ナ
リト嘆息セサルヲ得サルナリ

此學派ノ弊ハ唯タ人生ノ制シ能ハサル苦樂ニ頓着セ

サルノ主義ヲ固執シテ遂ニ中庸ヲ失レタルニ在ルノ

然レ氏許多ノ國士ヲ陶冶シ許多ノ大人ヲ生シ賢君良
主ノ輩出セシハ皆ナ此學派ノ功德ニアラサルハ無シ
姑ク真神無誠ノ教義ヲ放下シ去リテ當時ノ人物ヲ通
觀セヨ、アントニユース帝及ヒジュリーヤン帝ニ於テ
其一端ヲ證スベシ殊ニジュリリヤン帝ノ如キハ基督
教徒ヲ虐待セシヲアリト雖氏其ノ萬姓ニ君臨シテ賢
明ノ治ヲ致シタルハ羅馬帝紀中ニ於テ曾テ見サル所
ナリ但シ予ハ決シテ帝ハ基督教ヲ廢止
ナリセシ事ニ左祖シテ爾ホフニアラバ

此學派ノ徒ハ富貴功名、苦樂煩惱等ヲ以テ、浮世ノ空事ト做シ一切之ヲ放棄シ唯タ全ク人類ノ福利ヲ進メ社會ノ義務ヲ竭ストニ勤行シ其胸中ニ蓄フル一片ノ誠心ヲ尊崇シテ恰モ人類ノ主護神ト認ムルカ如シ此學派ノ歸趣ハ已ニ生ヲ稟テ社會ノ人トナレハ社會ノ為メニ勤勞スルハ固ヨリ分内ノ事ト信シテ疑ハス其勞シテ倦サルノ状ハ賞譽自ラ其中ニ存スルカ如シ之ヲ要スルニ唯タ他人ノ幸福ヲ増進スルヲ以テ自己ノ幸福ヲ増進スルノ種子ト為スカ如キノ思想ヲ起セ

第十一回 參禪止觀ノヲ論ス

天ノ人ヲ造ルヤ其玄意ハ已レヲ保チ已レヲ養ヒ自ラ衣食ノ道ヲ求メ自ラ社會ノ務ヲ營マシムルニ外ナラス故ニ民ノ為メニ教ヲ設クルニハ身ヲ禪門ニ委シテ全ク世事ヲ抛ツ等ノ弊ニ陷ラサランヲ專要ナリト

ス 佛教ヲウキム教ノ弊此ニアリ

田教ノ人ハ日ニ五回祈禱ノ禮ヲ修メ一回ノ祈禱コトニ必ス世務ニ関セル一切ノ事ヲ放下シテ心頭ニ懸ルヲ許サ、ルニ依リ終ニ禪定ノ慣習ヲ成シテ世間ノ人事ヲ勤行セス且ツ命數常アリ人力ノ得テ奈何トモ

為シ能ハサルノ教義アリ人ヲシテ益以テ勤身營務ノ
因縁ニ疎遠ナラシム要スルニ其宗諦ハ皆ナ恩愛ノ至
情ヲ渙散スヘキノ實因ナラサルハ无シ然ルヲ況ヤ之
ニ加フルニ政治嚴酷法律偏頗ニシテ人心ノ危惧ヲ増
スアラハ何ヲ以テ國家ノ廢滅ニ至ルヲ防キ得ヘケンヤ
當初ガオルスノ宗教波斯ニ行ルニ方テハ能ク國土
ノ繁昌ヲ致シ專制政ノ惡果ヲ改良シテ大ニ觀ルヘキ
モノアリシカ後ニ回教ヲ奉スルニ迫テ遂ニ國家ノ衰
運ヲ招ケリ是レ皆ナ宗諦ノ宜キヲ得サルニ基セズレ
バアラサルナリ

第十二回 懺悔苦行ノ事

贖罪ノ苦行ハ須ラク勤勞ノ意ト合シテ而ノ安逸ノ意
ト合ス可ラス又清儉ノ意ヲ以テシテ而メ貪欲ノ意ヲ
以テス可ラズ又慈善ノ意ニ出テ、而メ卓絶超俗ノ意
ニ出ツ可ラス

第十三回 不可贖ノ罪惡ヲ論ス

シセローカ援引タル高僧傳紀ノ文ニ據レハ羅馬人ノ
教義中ニハ贖フ可ラサルノ罪惡ヲ設クルモノ、如シ
是レゾジムスカ小説ヲ構造シテ孔士且丁帝ノ轉宗セ
ル意趣ノ不善ニ根由セシ一ヲ痛論シ又ジュリヤン帝

カ該撒紀ヲ著シテ以テ之ヲ刺譏ヒシ所以ナリ
異教外道ニ於テハ當ニ一二ノ巨惡大罪ヲ禁止スルニ
止マリ其狀猶小惡業ヲ作ス所ノ肘ヲ掣スルノミニシ
テ心意ヲ不問ニ置クカ如キアルヲ免レス故ニ不可贖
ノ罪惡ヲ設クルモ亦ク已ムヲ得サルニ出ヅト謂ハサ
ルベカラズ然レモ我カ基督教ニ至テハ一切ノ情欲ヲ
抑制シ諸凡ノ作業ヲ約束スルノミナラス併セテ意想
ニ及ビ心身二者ヲ束縛スル所ノ繩索數條ニシテ毫モ
放縱スル所ナク、人間審判ノ外ニ於テ別ニ一種ノ法衙
ヲ設ケ、改悔ノ心ヨリ恩愛ヲ生シ、恩愛極リテ復タ改悔

ノ心ヲ生シテ輪轉止マス、法官ト罪囚ノ間ニ一個ノ中
裁人ヲ置キ公義ノ道ト中裁人ノ間ニ一個ノ法官ヲ置
クヲ以テ如是宗教ニ於テハ絶テ不可贖ノ罪惡ヲ設ケ
ルヲ要セサルナリ抑モ此宗教ハ一切衆生ニ畏望ノ二
情ヲ發作セシノ敢テ吾人想念ノ先天ニ於テ不可贖ノ
罪惡ヲ見ハスヘキノ理ナシト雖モ若シ始終ノ行業不
善ニシテ之ヲ改メサレハ竟ニ不可贖ノ極ニ到ル可ク、
且新クニ罪ヲ獲テ新クニ之ヲ贖フテ真神ノ慈悲ヲ狎
蔑スルニ至ルハ實ニ恐ルヘク戒ム可キノ惡行タリ況
ヤ未タ舊惡ヲ贖ヒ能ハサルニ又新惡ヲ作ルハ大惡大

悲ノ限界ヲ超ヘ極メテ懲ス可ク罰スベキノ罪惡タレハ能ク之ヲ慎ミ能ク之ヲ改メ以テ真神ノ慈悲ニ負カサルヲ教義ト定メタリ

第十四回 教法ノ民法ニ與フ所ノ映響如何

宗教民法ノ二者ハ齊シク人ヲ薰陶シテ良國士タラシムヘキ性質ヲ具有スヘキヲ以テ若シ其一ニ於テ此目的ヲ達シ能ハサルハ其二ノ作用ヲ強盛ニスヘキハ論ヲ俟タサル所ナレハ教義寛和ニ失スルヲアラハ法律ノ嚴明ヲ以テ之ヲ濟ハサル可ラス

日本ノ國教ハ教義簡易ニシテ絶テ來世ノ賞罰ヲ設ケ

サルヲ以テ其缺漏ヲ補フカ爲ノニ嚴猛ヲ旨趣トシテ法律ヲ制定シ之ヲ施行スルヤ精密ニシテ毫モ假貸スルヲナシ

若シ夫レ宗教ニ由テ必守無違ノ主義ヲ立ツルハ則チ之ニ依テ人心ヲ約束シテ放縱ノ惡德ニ移ラシメサルカ爲メニ故ラニ刑法ヲ嚴ニシ宰官ノ督察ヲ密ニセサル可ラス然レモ若シ其宗教ノ主義自由ノ點ニ在リトスルハ之ニ反シテ刑法ノ主旨ヲ寛和ニセサル可ラス

靈魂無為不動ノ論ヨリシテ回教ニ先天定數ノ主義ヲ

立テ先天定數ノ主義ヨリシテ復タ靈魂無為不動ノ論ヲ生シ彼此交因ト為リ果ト為リテ相連絡シ之ヲ真神ノ訓誡ト認メテ勤身營務ノ氣力ヲ失墜ス此際ニ臨テハ必ス法律ハ以テ宰官ノ注意ヲ提醒シ宗教ハ以テ人民ノ睡眠ヲ覺破セサル可ラス
若シ宗教ニ於テ民法ノ當サニ許容スヘキヲ禁責スルニ至レハ民法ニ於テハ却テ之ヲ許容スルノ弊害ヲ生ス宗教ノ許容スヘキヲ民法ニテ禁制スル時ニ於テモ亦然ラサルハ死シ是レ政教全ク背馳セル徵候ニシテ深シ憂フ可キノ至ナリ

成吉思可汗

元太祖

カ引率セル韃靼人ハ小刀ヲ火中ニ投

シ身ヲ杖ニ倚セ手綱ニテ馬ヲ鞭チ骨ヲ以テ骨ヲ折ル等ノ瑣事ヲ大罪極惡ト認メ此教戒ヲ犯セルモノハ必ス之ヲ極刑ニ處スト雖モ契約ノ言ヲ食ミ他人ノ財ヲ奪ヒ人ヲ害シ人ヲ殺ス等ノ大事ヲ見テ曾テ罪惡ト為サス之ヲ約言スレバ可モ無ク不可モ死キ小事ニ必守無違ノ效ヲ有セシムル法律ハ其弊ヤ終ニ必守無違ノ大事ヲシテ可不可ナキノ小事ト慢視スルニ至ルヲ免

臺灣ノ民ハ冥界ニ地獄アルノ説ヲ信スレバ其罰スル

所ノ罪惡ハ夏日裸體ナラスシテ外出シ、絹衣ヲ着セス
シテ洋布ヲ着シ、牡蠣ヲ求メント欲シ、或ハ吉凶ヲ禽聲
ニトセスシテ業務ヲ營ム等ノ數事ニ止マリテ更ニ醜
酒淫行ヲ惡徳ト認メサルノミナラス子女ニ亂倫ノ醜
行アルヲ以テ神意ニ叶フト信受セリ

若シ偶然行ヒ易キ事ヲ以テ人心救脱ノ教義トスルハ
ハ其ノ人類ヲ感化スルノ作用ノ極ノテ微弱ナルハ必
然ナリ印度人ハ恒河ノ水ヲ以テ一切現世ノ罪業ヲ拔
クテ清淨身ヲ得ルノ功德アリトシ此河岸ニテ死ヲ遂
ルモノハ來世ノ苦惱ヲ免レテ極樂界ニ往生ス可キ果

報ヲ結フト妄信シ遠阪僻壤ヨリ屍骸ヲ運ヒ來リテ水
葬スルモノ比々相踵ケリ其弊ヤ唯タ死屍ノ此河ニ入
ルヤ否ヤヲ問フテ毫モ在世ノ德行如何ヲ問ハサルニ
至ル人民ノ道義地ニ墜チサルヲ欲スト雖モ豈ニ得ハ
ケンヤ

既ニ人民ノ意想中ニ來世ノ樂土アルヲ信受セシメ
ハ必ス之ニ冥罰ヲ蒙ムル可キ苦界ヲ附シテ勸懲兩備
ノ方便ヲ立テサル可ラス若シ然ラズシテ人心唯タ樂
土ヲ希フ而已ニテ少シモ冥罰ヲ恐レサルハ現世ニ
幾多ノ民法アルモ決シテ躬行ニ影響シ能ハサル可シ

何トナレハ自ラ來世樂土ノ往生疑ヒ無シト確信スル
人ハ一死ヲ視ルヲ歸ルル如クナルヲ以テ制法者ノ威
權モ之ヲ奈何トモ為シ能ハサレハナリ試ニ思ヘ若シ
宰官ノ施セル極苦ノ刑ヲ將テ轉タ極樂ノ果ヲ結フハ
ト因縁ト認スル人アラハ豈ニ法律ノ作用ヲ以テ之ヲ
約束スルヲ得ヘケンヤ

第十五回 民法ヲ以テ教法ノ陋劣ヲ改良スルヲ
質樸不文ニシテ或ハ鬼神ノ理ニ迷ヒ或ハ淫祠ヲ建テ
秘祭ヲ行ヒ以テ大ニ道德ヲ壞リ風俗ヲ害ヒシヲハ上
古未聞ノ國史ニ徴シテ其例ノ尠カラサルヲ知ルヘシ

宜ナル哉アリストートルノ論ニ民俗此陋ニ及フキハ
法律上一家ノ父ヲシテ寺觀ニ詣テ其妻子ニ代リテ秘
祭ヲ行ハシムルヲ許ス可シト果シテ然ラハ民法ノ
力ヲ以テ宗教ノ陋ヲ防キ風俗ノ敗壞ヲ維持スルニ足
リ其作用實ニ稱讚スルニ餘アリ

オীগストス帝ハ少年男女ニシテ老輩ノ同伴ヲ夕夜
祭ニ詣ツルヲ禁止シ其後「ルベリカリヤ」ノ年祭ヲ再
興スルニ及テモ尚ホ少年ノ裸體ニシテ其儀式ニ預カ
ルヲ許容セサリキ

第十六回 教法ヲ以テ政治ノ缺典ヲ補正スルヲ

前文ニ反シテ法律ノ力ヲ以テ國家ノ綱紀ヲ保ツニ足
ラサルニ方テハ却テ宗教ノ方便ニ賴リテ之ヲ維持ス
ルヲアリ

故ニ若シ國內ニ騷亂相踵キ人民寧處ニ違アラサルキ
ハ宗教ノ方便ニ因テ一地方ノ平靜ヲ致スヲ往々之ア
リ即チ古ノ希臘人中ニテユリオンノ一族ハ國神「アポ
ルローン」ノ祠官タルノ故ヲ以テ兵革ヲ執ラシメ能ハサ
ルカ如キ是レナリ

輿論ニ問スシテ輒スク兵端ヲ開キ或ハ兵亂ノ局ヲ結
了シ或ハ之ヲ防止スヘキ憲法ヲ立サル邦土ニ在リテ

ハ宗教上ニテ平和ヲ守リ又ハ戰時ニ休息ノ時ヲ定メ
以テ國民ヲシテ耕耘ニ從事セシメ或ハ一國ノ生計ヲ
繫クヘキ自餘ノ業務ヲ經營セシムルヲアリ

亞刺伯ノ諸部落ハ一年中ニ四月ノ休戰期アリ之ヲ犯
スモノハ神罰逃ル可ラストセリ又我カ佛國ニ於テ往
古有土ノ侯伯ニテ親ヲ和戰ヲ決定セシ頃ニハ宗教上
ニテ時間ヲ定メテ休戰ノ事ヲ宣布セシヲアリ

第十七回 同上

一國中ニ憎惡怨恨ノ原因數多ナルキハ其教義ニ於テ
之ヲ和解スハキノ方便門ヲ闕クヲ專要ナリトス亞刺

伯人ハ原來強奪ノ惡習ニ偏向スルヨリ他人ヲ害シ不義ヲ行フテ刑辟ニ陷ルモノ比々相踵ケリ故ニ墨哈默ハ若シ人アリ兄弟ノ仇ヲ赦シテ報復ノ念ヲ止ムル片ハ特ニ罪人ヨリ損害ノ償金及ヒ利息ヲ追徴スルヲ得可シ然レバ一旦償金ヲ收受シテ尚ホ罪人ヲ傷クモノハ冥界審判ノ時ニ至テ無間ノ苦刑ヲ蒙ムル可シトノ法訓ヲ制定セリ

日耳曼人ハ其ノ近族ノ氣質ヲ稟テ憎惡怨恨ノ情甚ク熾ナリト雖バ一定ノ限度アリテ之ヲ解釋スヘク即チ人ヲ殺スモノハ數頭ノ牛羊ヲ納メテ其罪ヲ贖ヒ更ニ

死者ノ家族各人ニ賠償ヲ得ヒシメタルカ如キ是ナリタシトスノ論ニ自由ナル人民ニ憎惡ノ情アルハ甚ク恐ルヘキヲ以テ贖罪ノ法ヲ設クルハ必要ニシテ缺ク可ラスト謂ヘリ顧フニ此人民ハ極メテ法教師ヲ尊信セルカ故ニ贖罪講和ニ至ルマテハ教師必ス其間ニ周旋シテ勸解ノ事ヲ勉メタルナル可レ

麻刺甲ノ住民ハ曾テ贖罪講和ノ方法ヲ設ケサルヨリ若シ人ヲ殺スモノアレハ其身ハ必ス死者ノ親戚朋友ノ手ニ死セサルヲ得サルト覺知スルカ故ニ狂暴益劇シク終ニ路上手ニ觸ル、モノヲ殺シテ憚ラサルニ

至レリ

第十八回 教法ニ民法ノ效用ヲ有セシムル所以

ヲ論ス

希臘國初ノ人民ハ聚散常ナラス海ニ在テハ盜賊ト為
リ陸ニ上テハ不義ノ舉動ヲ為シ實ニ政府ノ設ナク法
律備ハラサルノ一小部落ニ過キサリキ然ルニヘルキ
ユルス、リクルダスノ大人踵テ起リ非常ノ功業ヲ建テ
テ國風民俗ヲ豹變シ竟ニ日進ノ形勢ヲ養成シタリ其
法ヲ立テ制ヲ定メ人民ヲ教化シ以テ殺人ノ惡業ヲ熾
忌セシノタルノ功用ハ決シテ一步ヲ宗教ノ德ニ譲ラ

スト謂フモ可ナリ其制ニ曰ク人ヲ殺害スルモノハ怨
靈其心ヲ責メテ恐怖ノ念ヲ生セシメ必ス生前ノ遺恨
ヲ報スト故ニ人民ハ罪人ト交際ヲ為サス說話ヲ交ヘ
ス若シ之アレハ國人彈指シテ與ニ齒セズ且ツ人ヲ殺
スモノアレハ之ヲ府外ニ放逐シテ直ニ贖罪ノ祭ヲ行
ハリ

第十九回 政府民人ノ利害ノ係ル所ハ教義ノ真

偽ニ於ルヨリモ其之ヲ用井テ宜シキ
ヲ得ルト否ラサルトニ依ルテヲ論ス
教義極メテ真實極メテ神聖ナルモ若シ社會ノ主義ト

相背馳スル片ハ極メテ厭フヘキノ映響ヲ生スルヲ免
レズ之ニ及シテ教義純善ナラスト雖モ苟クモ能ク社
會ノ主義ニ密接スルノ方便ヲ得ル片ハ極良ノ應效ヲ
招ク可シ

儒教ハ靈魂不朽ノ理ヲ排斥シ克情ノ學派ハ更ニ之ヲ
信受セズ此二派ハ乖戾取ルニ足ラサルノ教義ヨリシ
テ却テ社會ヲ教化薰陶スルニ極メテ讚美スヘキノ功
徳ヲ生シ釋道ノ二教ハ此真理ヲ信奉シテ教義極メテ
純善ナルモ其社會ニ及フ所ノ映響ハ甚ク厭惡スヘキ
モノアリ

靈魂不朽ノ理ニ通スル一深カラスシテ其真諦ヲ悟得

セサル片ハ國ノ華夷ヲ問ハス時ノ古今ヲ別タス婦女
臣民タルモノ、至情已ムヲ得サルヨリ自ラ一死ヲ抛
テ來世ニ君夫ニ殉シテ以テ現世ノ愛敬ヲ盡サント欲
スルノ心ヲ起サシムルノ弊アリ西印度、丁赫、日本、麻甲
沙諸邦ノ風俗是レナリ

此惡俗ヲ生スル淵源ハ靈魂不朽ノ真理ニ出ルニ非ス
シテ却テ人民復活ノ偽説ニ胚胎スルヲ居多ナリトス
此説ヲ妄信スル人ハ蓋シ身後ニ於テモ現世同様ノ情
欲需要アリト思想スルヲ以テナリ由是觀之靈魂不朽

ノ理其人心ニ映響ヲ與フルヤ決シテ輕少ニ非サルナ
リ何トナレハ當ニ現世ヲ捨テ來世ニ赴クハ匹夫ノ
愚ト雖モ之ヲ知リ之ヲ行フニ難ラス且變形ノ説ヨリ
モ其心意ヲ慰ムル所多クレハナリ

宗教ハ單ニ其主義ヲ定ムルヲ以テ充分ナリトス可ラ
ス必ス復タ其應效ノ及フ所ノ方向ヲモ決セサル可ラ
ス我カ基督教ニ於テハ主義作用ニナカラ甚タ其宜シ
キヲ得テ一喙ヲ容ル、所ナク殊ニ前ニ論セシ理諦ニ
至テハ實ニ然リトス抑モ基督ノ教義タルヤ世人ヲシ
テ虔信ノ正鵠タル世界ヲ渴望セシムレハ世人ノ現ニ

閱歷スル所ノ世界ト全ク相同シカラス、人身復活ノ説
ニ至テモ唯ク無形ナル精神ノト信用シテ肉身ノ一
ト思想セサルナリ

第十一回 同上

波斯ノ古教典ニ曰ク神聖ノ正果ヲ得ント欲セハ子女
ノ教訓ヲ懈ル勿レ、子女ノ善行ノ皆ナ汝カ身ニ歸スベ
キナリト又婚姻ヲ勸諭シテ曰ク子女ハ來世ノ裁判ヲ
請フ日ニ至テ恰モ彼岸ニ達スルノ橋梁ナリ子女ナキ
モハ彼岸ニ達スルヲ能ハスト其言ハ偽義ニ出ルト
雖モソノ社會ニ利益ヲ與フルヤ極メテ大ナルモノナ

第二十一回 輪廻ノ説ヲ論ス

靈魂不朽ノ真理、今レテ三派ト為リ基督教ハ純ラ其永久不滅ヲ説キサイチヤンノ教義ハ唯タ其ノ現當二世ニ轉スルヲ論シ印度教ハ輪廻ノ説ヲ主張ス其不朽ノ理ト轉生ノ説トハ己ニ前文ニ論了スル所ナリ印度教ノ輪廻説ニ至テハ解釋ノ巧拙ニ因テ應效ノ善惡ヲ生シテ關係少ナカラサルカ故ニ茲ニ一言ノ述ル所アラントス此宗乘ハ人心ヲ化導シテ兇殺ノ事ヲ畏怖セシムルヲ以テ印度ニ於テハ殺人ノ罪ヲ犯スモノ甚ク

鮮ナク死刑ノ如キハ稀ニ見ル所ニシテ殆ト刑措ノ風アリト雖モ國內更ニ騷亂ヲ企ルモノ無シ然ルニ良人死スレハ其妻自ラ身ヲ焚キテ殉死スルノ風俗アリ無罪ノ人ヲレテ却テ令終ヲ得サラシム亦怪シムハキノ至ノリ

第二十二回 教法ニテ敢テ關係ナキヲ憎惡セ

シムルハ甚ク危險ナルヲ論ス
印度ニ於テハ宗教ノ舊習ニ依リテ一種ノ榮譽ヲ造為シ之ニ因テ諸部落ノ民ヲシテ自他互ニ憎惡ノ情ヲ起サシメタリ而メ此榮譽ハ全ク教法ニ淵源スルモノナ

レハ以テ民事上ノ榮譽ト為スニ足ラス甚シキハ國王
ニ陪食スルヲ以テ人ノ體面ヲ汚スト思フニ至レリ
此ノ如キ榮譽ハ我カ歐土ニ於テ夫ノ貴賤有別ノ理ヨ
リ在上ノ人ヲシテ自ラ下人ヲ親愛スルノ情意ヲ起サ
シムルモノト全ク相異ナリテ唯タ他人ヲ憎惡スルノ
原因タルニ過キス

一切ノ教義ニ於テ邪惡ノ一事ヲ除ク外憎惡ノ念ヲ誘
掖ス可ラス宜ク人類相親シミ相憐レムノ情意ヲ濃厚
ナラシムルヲ要ス

墨哈默、印度ノ諸教ヲ信奉スル人種ハ其數甚タ多クシ

テ救擧ニ違アラス而ノ印度人ハ牛肉ヲ食フノ故ヲ以
テ回教ノ徒ヲ惡ミ、回教ヲ奉スル人ハ豚肉ヲ斷セサル
ヲ以テ印度人ヲ憎メリ

第二十三回 祭神ノ日ヲ論ス

若シ夫レ教義ニヨリ休息ノ時日ヲ定ムルハ須ラキ
先ツ風土人情ニ依リテ其緩急ヲ斟酌シ而ノ後チ祭祀
セシムル欲スル神明ノ莊嚴ニ及フベシ
雅典人ハ祭日ノ過多ナルカ為メニ大不利ヲ蒙ムレリ
今其一事ヲ舉ケテ之ヲ言ハンニ當時此國民ハ兵力強
盛ニシテ希臘全土ニ霸ヲ稱シ四方ノ民皆ナ來リテ爭

訟ノ曲直ヲ決シタリシカハ休息ノ日頻繁ニシテ終ニ其機務ヲ判理スルニ暇アラザリキ

孔士且丁帝ハ嘗テ人民ニ安息日ヲ守ルヘキ敕令ヲ下シタレバ之ヲ府邑ノ市人ニ行フテ田野ノ住民ニ施サ、リキ是レ府邑ノ人ニ於テハ其勞作全ク利益ノ餘裕ヲ得シカ為ノニ在レバ田野ノ民ニ於テハ衣食ノ需用ニ必須ニシテ一日休止スレハ饑寒ノ患アルヲ免レサルヲ以テナリ

貿易ニ賴テ國ヲ立ツル所ノ邦土ニ於テモ亦此理ニ則トシ貿易ノ繁閑ニ從ヒ祭日ノ多少ヲ斟酌セサル可ラ

基督教ヲ奉スル諸國ニ於ケル其新教ヲ奉スルモノハ概シテ此ノ邦土ニ多ケレハ宜シク祭日ノ數ヲ減シテ其南部ニ於テ舊教ヲ奉スルモノヨリモ休息日ノ少キヲ要スヘシ是レ祭日ヲ廢止スルハ舊教ノ國ニ於ケルコリモ新教ノ國ニ適應スル所以ナリ

タムヒールハ各國風土ノ同シカラサルニ從テ人民ノ游樂ニ差異アルヲ論述セリ印度炎熱ノ地ハ甚タ美果ニ富ムヲ以テ野蠻ノ民糊口ニ窮スルノ患無シ故ニ游樂ニ光陰ヲ費スモ敢テ妨ケナシト雖モ寒地ニ住ムル民ハ斷ヘス山ニ獵シ海ニ漁セサレハ生計ヲ立ツル

ニ由ナク閑暇ノ時多ラス隨テ音樂舞蹈及ヒ祭日ニ從
事スルヲ最モ尠ナシ若シ此等ノ人民ニ新クニ宗教ヲ
宣布セント欲セハ必ス先ツ風土ノ差異ニ應シテ祭日
ノ定數ヲ立テサル可ラスト

第二十四回 土地ニ從テ宗教ノ適否アルヲ論ス
土地同シカニテハ宗教モ亦タ從テ異ナラサルヲ得
マモンテズマーハ頑然我カ宗教ヲ固執シテ西班牙人
ノ宗教ハ特リ其ノ本國ニ在テ善良ナルハク墨即可ニ
於テハ我カ宗教ノ更ニ克ク其ノ風土人情ニ適應スル
ニ如カスト抗論セリ理ニ明カナル言ト謂フヘシ賢明

ナル制法者ト雖モ自然ノ勢ニ因テ成立スル舊習ヲ奈
何トモ為シ能ハサルモノナレハナリ

印度地方ハ炎熱甚ク熾ニ大地焚クカ如クニシテ牲畜
ノ蕃息ヲ妨ケ常ニ犁鋤ニ使用スヘキ牛犢足ラサルノ
ミナラス動モハレハ疾病ニ罹リテ斃ル、カ故ニ殺生
ヲ戒メ畜類ヲ保存スルノ教規ハ大ニ其國ノ政治ニ利
益アリ是レ輪廻說ノ該地ニ適應スル所以ナリ
酷暑金ヲ鑠シ地面乾裂スルノ際水利ノ方便ニ由リテ
唯ニ米豆諸穀ノ豐熟ヲ致スカ故ニ肉食ヲ禁止シテ穀
粒ヲ人身ノ滋養ニ充ツヘキ教規ハ能ク其風土ニ適應

シテ間然スル所ナキナリ

印度ノ牛肉ハ其味甚タ劣リテ食用ニ適セサレ氏其ノ乳酪ハ取テ以テ滋養ノ一部ヲ助クヘシ故ニ牛ヲ殺シテ其ノ肉ヲ食フヲ禁止スルモ敢テ理ニ戾ルヲ見サルナリ

雅典ハ人烟稠密ニシテ最モ繁昌ヲ極メタレ氏土地磽确ニシテ物品ノ供給足ラス故ニ其法旨ハ「一物ノ微ト雖モ之ヲ神明ニ獻進スルノ功德ハ一頭ノ牛ヲ犠牲ニ供スルヨリ更ニ大ナリ」トセリ

第二十五回 甲國ノ宗教ヲ乙國ニ移用スルノ不

利

前款ニ説明セル事情アルニヨリ甲國ノ宗教ヲ乙國ニ移用スルカ為メニ大害ヲ招クヲ斷ナカラス

グーレンウキルリールス曰ク亞剌伯地方ハ大抵草木無ク家豚ノ飼料ヲ得ルニ容易ナラス加フルニ河水塩氣ヲ含テ皮膚病ヲ患フモノ甚タ多シ故ニ豚肉ヲ食スルノ禁令ヲ此國ニ施行スルハ固ヨリ人民ノ利益ノ係ル所ナルヘケレ氏支那ノ如キ豚肉ヲ普通ノ滋養ニ供スル地方ニハ決シテ施行シ能ハサルナリ

茲ニ再ヒ前文ノ理ヲ熟考スルニ、サントリユスノ説

ニテハ「豚肉ハ蒸發ノ作用極メテ弱ク從テ他ノ食物ノ消化ヲ妨害シ常食三分一ノ減少ヲ生シ遂ニ皮膚病ノ原因ト爲ルト然ラハ則チパレスチン、亞拉比亞、埃及、ライビヤノ如キ疥癬流行ノ風土ニ在テハ豚肉食用ノ禁令ヲ布クヲ以テ治術ノ宜シキヲ得ルト謂フヘキナリ

第二十六回 同上

ジヨン、チャルドン曰ク波斯ニハ邊疆ノキユル一水ヲ除ク外更ニ舟楫ヲ通スヘキ江河ナシ故ニガオルスノ舊法ヲ以テ江河ノ通航ヲ禁止スト雖他國ニ於ルカ如ク物貨壅塞貿易衰亡ノ害ヲ蒙ムラズ

熱國ニ於テハ屢河水ニ浴シテ涼ヲ取ラサルヲ得ス是レ印度教及ヒ回教ニ浴水ヲ勸ムル所以ニシテ印度教ニ於テハ身ヲ流泉ニ清メテ神ヲ禱レハ其功德淺ラスト説クト雖モ決シテ之ヲ寒國ニ施スヲ得可ラサルナリ

甲國ノ風土ニ適應シタル宗教ヲ乙國ニ移シ來ルモ若シ其風土ニ抵觸シテ相容ラレサルハ決シテ地歩ヲ占メテ定着スルヲ能ハス強テ之ヲ設立スルモ他日之ヲ顧ミルモノナキニ到ルハ必然ノ勢ナリ人類ノ淺見ヲ以テ之ヲ測ルニ東西寒熱ノ大差アルハ故ヲニ回教

基督教ノ為メニ一大鴻溝ヲ劃ルカ如ク然リ
其理斯ノ如キヲ以テ宗教ニハ常ニ一定ノ主諦ト普通
ノ禮拜法ヲ設クルヲ良シトス其禮拜ノ執行ヲ約束ス
ル宗規ハ務メテ煩密ニ涉ラサルヲ旨トスヘシ譬ヘハ
一般ニ情欲ヲ抑制セシムルハ敢テ害無シト雖モ條目
ヲ立テ其躬行ヲ拘束スルハ決シテ宜シキヲ得ルモノ
ニ非ス基督教ハ持戒勤行ヲ教門ノ清規ト定メタレバ
一定ノ舉動ハ人法ノ掌トル所ト為シテ時々之ヲ變改
セシメタリ其趣意大ニ嘉尚スヘキモノアリ

萬法精理卷之廿五

何禮之譯

教制及ヒ其ノ外部ニ現ル、教義ニ関涉スル原理ヲ
論ス

第一回 宗教ニ関セル人情

神ヲ敬フ人ト神ヲ信セサル人ハ常ニ口宗教ノ事絶エ
ス敬神ノ人ハ唯ク其ノ愛スル所ヲ語り不信ノ人ハ唯
ク其ノ懼ル、所ヲ語ル

第二回 信教ノ心情相同シカラサルヲ論ス
宇内ノ諸教各其旨ヲ殊ニスレハ宗徒ノ信心ニ於テモ

亦タ一樣ナルヲ期ス可ラス而ノ信心ノ深淺同シカラ
サル所以ハ其教諦ノ果シテ人類ノ思想覺悟ニ投合ス
ルト否ラサルトニ出ルノミ

我カ歐人ハ頗ル偶像ヲ好ム然レモ偶像ヲ拜スル宗教
ヲ信仰セズ我カ歐人ハ偏ニ無形ノ説ヲ愛スルニ非ス
然レモ甚タ無形ノ神ニ事フヲ誨フル所以ノ宗教ニ歸
依ス是レ他無シ我カ歐人ノ智識ハ既ニ能ク不文蒙昧
ノ陋ヲ脱シテ真神ヲ崇敬スル宗教ヲ擇テ之ヲ信奉ス
ヘキ地位ニ達スルカ故ナリ之ヲ要スルニ像教ハ無識
不文ノ民ノ歸依スル所無形ノ真神ヲ開化國人ノ歸依

スル所ト謂フモ不可ナカラシ

若シ夫レ其ノ教義ハ人ノ腔子裡ニ真神無形ノ玄妙ヲ
悟ラシメ更ニ加フルニ有形ノ莊嚴ヲ以テ其禮拜ノ標
準ト定ムルモノアラハ則チ玄妙ノ神理ヲ信スルノ心
ト耳目ノ感觸ニ偏スル情思ト相合スルヲ以テ歸依渴
仰シ念益堅固ニシテ動カサル可シ故ニ專ラ耳目ニ觸
レル所ノ莊嚴ヲ宗諦トスル羅馬教徒ノ信心ヲ將テ夫
ノ無形ノ教義ノミヲ立ル新教ノ徒ニ比較スルハ更
ニ一層深厚ニシテ其ノ布教ニ熱心スルノ念頭モ亦一
層激切ナルヲ覺エタリ

故ニエフエシユスノ人民ハ長老ノ會議ニテ處女馬利
ヲ神母ト稱シテ妨ケ無シト議定セシヲ聞キテ欣喜
ノ至ニ堪ヘス爭フテ教正ノ手ヲ握リ其膝ヲ抱キ歡聲
一城ヲ震動セリト云フ

若シ夫レ時運ノ開明ニ適當スル宗教ニシテ加フルニ
神眷ヲ蒙ムハト自信シ而ノ之ヲ崇奉スルト否ラサル
トニ由テ一身ノ利害ヲ判ツカ如キアラハ益信心ノ深
切ヲ致スモノナリ彼ノ回教ノ宗徒カ信心堅固ニシテ
相懈ラサルハ必竟一方ニハ像教ヲ奉スル國民アルニ
由テ自ラ唯一真神ヲ保護スルノ意想奮起シ又一方ニ

ハ基督教ノ刺衝アルニ因テ自ラ神眷ノ注ク所ト信認
スルニ胚胎セリ

儀禮繁縟ナル宗教ノ人心ヲ收攬セル效力ハ迥カニ其
ノ簡易ナルモノニ勝レリ抑モ人情ハ朝夕勤行スル所
ノ慣習ニ知ラス識ラス偏倚スルモノナレハ彼ノ回教
猶太ノ宗徒カ舊俗ヲ固守シテ其心敢テ移ラサルト專
ラ射獵鬪爭ニ從事シテ更ニ教儀ノ設ナキ未開ノ民ノ
速カニ改宗シテ杏色ナキトヲ視テ以テ教義ノ繁簡ニ
從テ信仰ノ厚薄ヲ生スル所以ヲ知ルヘキナリ此章ハ
教心ノ深淺ヲ論シ第廿四卷第廿六回ハ專ラ布教
ノ方便ヲ論スルカ故ニ文意自ラ相及スルカ如シ

人ハ常ニ願望、恐懼ノ二情ヲ懷ク、取モ深切ナリ故ニ
天堂地獄ノ説ヲ立サル宗教ハ人情ヲ感動スルヲ鮮ナ
シ是レ日本國ニ外教ノ傳播シ易キ所以ナリ蓋シ外教
一タヒ此國ニ入ルヤ其ノ人民下ナ之ニ歸嚮シ之ヲ信
仰シテ制止スヘカラサルニ至ルハ全ク耶蘇、印度ノ二
教ハ天堂地獄ノ應報ヲ立レ、日本ノ神道ニハ之ヲ説
サルニ由レリ

信教心ノ益、堅固ナランヲ欲セハ須ラク道德善行ヲ
主眼トシテ勸化懈ナキヲ要ス抑モ日常ノ鎖事ニ於テ
假令不善ノ行アルヲ免レサルノ人ト雖モ死生ノ大事

ニ臨テハ頗ル正直不昧ノ真性ヲ露スモノナレハ斷シ
テ人類ハ道德ヲ愛スルノ天性アリト謂フモ過言ニア
ラス夫レ善ヲ善シ惡ヲ惡ムノ人情ハ之ヲ劇場ノ觀客
ニ徴シテモ昭々掩フ可ラス一人トシテ忠臣孝子ノ事
蹟ヲ賞嘆シテ惡逆無道ニ扼腕セサルハナキナリ
蓋シ儀禮極ノテ嚴肅ナルモハ心思自ラ之ニ傾向シ隨
テ渴仰欽慕ノ念ヲ厚クス寺院ノ壯麗ナル、僧侶ノ殷富
ナル皆ナリ以テ人心ヲ感動スルニ足ルヘシ加之人民或
ハ災害ニ遇フト雖モ其原因ヲ宗教ニ歸シ却テ歸依ノ
念ヲ増スヲアリ然レハ人民ノ災害モ亦少シテ信教心

ノ端緒ト爲スニ足レリ

第三回 寺院ヲ論ス

開化國民ニシテ家屋ニ住居セサルハ蓋シ希ナリ是レ
特ニ寺院ヲ建立シテ神明ヲ崇奉シ禮拜祈禱ヲ行フ人
情由テ起ル所ナリ

蓋シ神明降臨ノ所ニ詣テ如在ノ敬ヲ致シ爲ニ群集シ
テソノ佑護ヲ祈リテ憂愁ヲ慰ムルハ洵トニ人情已ム
可カラリルノ樂趣ナルヘケレハナリ
然レモ人文稍開ケ稼穡ノ道ヲ知ルノ後ニアラサルヨ
リハ決シテ人情茲ニ赴クヲ無シ故ニ水草ヲ逐フテ帳

幕ニ棲息スル蠻民ニシテ寺院ヲ建立セシハ未タ曾
テ聞サル所ナリ

成吉思可汗

元ノ太祖

カボカラ

ノ寺院ニ入り馬蹄ニテ經

典ヲ蹂躪シタルモ其意全ク此理由ニ出タリ而シテ該帝
ハ回教ヲ審問シ大ニ其ノ道理ニ服シタレモ唯タ信士
ハ必スソノカノ本山ニ參詣セサル可ラストノ一條ニ
至テ疑團ヲ生シ何故ニ人民ハ到ル所ニ於テ神明ヲ禮拜
ス可ラサルヤト云々其旨趣ヲ了解シ能ハサリキ是蒙古
人ハ居ニ家屋ナキヲ以テ絶テ寺院ノ設アラサレハナリ
寺院ノ設ナキ人民ハ自己ノ宗教ニ信依スルノ心甚タ

薄弱ナリ蒙古人カ古来信教自由ノ精神ヲ守リテ曾テ
外教ヲ拒絶セサルト及ヒ歐北ノ蠻民カ羅馬ヲ征服セ
シヤ否ヤ忽チ耶蘇教ニ轉宗セルト亞米利加ノ土蕃カ
敢テ從來ノ宗教ニ戀々スル情ナキト我々歐洲諸邦ヨ
リバラグハイニ宣教士ヲ派出シテ以來其住民ハ極メ
テ熱心ナル耶蘇教徒ト爲リシヲ等皆ナ其証據ナリ
神明ハ犯罪人ノ如キ不幸薄命ノモノ、歸シテ以テ冥
護ヲ仰ク所ニシテ遂ニ人情自ラ寺院ヲ視テ逋逃ノ淵
藪ト思フニ至レリ就中希臘人ハ此人情甚ク熾盛ニシ
テ自然ノ慣習ヲ成スカ故ニ若シ人ヲ殺スニ依リテ衆

人ノ驅逐スル所トナリ府邑ニ容ラレス天地ニ踴躍シ
テ其身ヲ措クニ所ナキモノハ寺院ニ投シテ神明ノ保
護ヲ頼ムノ外アラサルナリ

寺院ニ遁レテ餘命ヲ繫クハ固ヨリ誤殺過失殺等惡意
ナキモノニ限リタレハ慣習ノ久シキ終ニ弊害ナキ能
ハハ故意ニ重罪ヲ犯スモノモ身ヲ寺院ニ投シテ誅戮
ヲ免ルハアリ大ニ當初ノ主義ニ悖戾ヒリ夫レ既ニ
罪ヲ人ニ得タル身ヲ以テ神明ニ依歸スルモ神明豈罪
惡ノ人ヲ保護スルノ理アランヤ其惡憲茲ニ到ラサル
ハ愚モ亦タ甚クシト謂フヘシ

希臘國中ニ罪犯ヲ曲庇スルノ所甚ク増加シタルヲ以テタシトスノ書ニ曰ク寺院ハ償債ノ義務ヲ適レタル猶徒及ヒ主家ノ脱走スル惡奴ノ輻輳スル所ト爲リテ憲官警吏ハ其職掌ヲ執行スルニ頗ル困難ヲ極メタレ此人等ハ唯ク之ヲ曲庇スルヲ以テ神慮ニ叶フト誤解シケレハ遂ニ元老院ハ己ムヲ得スシテ寺院ノ數ニ制限ヲ立タリ

摩西ノ法律ハ更ニ完全ニシテ頗ル用意ノ至レルヲ見ルヘシ其法制ハ初ノヨリ惡意ヲ挾ムニアラス偶然人ヲ殺スモノハ敢テ其罪ヲ問ハス其命ヲ償ハシメスト

雖氏被害者ノ親戚ノ耳目ニ觸ル、所在ニ居住スルヲ許サ、レハ特ニ一字ノ精舎ヲ設ケテ斯ル不幸ノ人ノ爲メニ悔過安身ノ地ヲ得セシメ曾テ重罪ヲ犯スモノ、爲メニ逋逃ノ淵藪トナスヲ許サ、リキ且猶太人ハ帳幕ノ中ニ神車ヲ置テ禮拜シ始終水草ヲ逐フテ遷移セシカ故ニ一地常住ノ寺院ノ如キ思想ヲ起サ、ルナリ其後猶太人モ寺院ヲ建立セリト雖此罪人ノ四方ヨリ來歸シテ禮拜ヲ妨クルヲ許容セス又人ヲ殺スモノアルニ若シ希臘人ノ如ク之ヲ追放スルハ國外ニ赴キテ異教外神ニ奉仕スルモ測ル可ラス國人甚ク

之ヲ欲セス此等ノ思想交モ各人ノ意中ニ相集マルヨ
リ國中ニ悔罪場ヲ創立シ教長ニ服從シテ其ノ餘命ヲ
繋カシメタリ

第四回 僧祝ノ職ヲ論ス

ボルフ井リ一曰ク太初ノ人ハ蘋蘩蕒藻ノ類ヲ以テ神
明ニ薦メタリ禮拜ノ儀式簡易質朴ナル際ハ一家中ノ
人長幼ノ別ナク皆ナ親ヲ僧祝ノ事ヲ執行スヘシ
然レモ敬神ノ至情益相加ハルニ從テ禮拜ノ儀式漸ク
繁縟ヲ致シ遂ニ田野ニ出テ耒鋤ヲ執ル身ヲ以テ之ニ
從事ス可ラサルト爲レリ

於レ是一宇ヲ立テ神廟ト定メ持ニ一人ヲ撰ミテ僧祝ト
ナシ專ラ祭祀禮拜ノ一ヲ掌管セシムルヲ猶ホ戸主ニ
一家ノ政ヲ攝行セシムルカ如シ故ニ僧祝ノ設ナキ人
民ハ概子皆ナ野蠻不文ノ陋俗ヲ免レス古ノ西白里人
現今ノウオルゴスキ人ノ如キ是レナリ
僧祝タル人ハ常ニ神明降臨ノ所ニ周旋シテ禮拜祈禱
ヲ執行シ品行心術俱ニ人民ノ具瞻スル所ナレハ宜シ
ク居常戒慎シテ人民ノ恭敬ヲ受クヘキナリ
苟クモ朝夕勤行懈ラサルニ非サルヨリハ神明ニ奉仕
スル清職ニ堪ヘサルヲ以テ諸國民多クハ僧祝ヲ専門

ノ一種族ト認メテ凡俗ノ人ト區別セリ古ノ埃及人猶
太人波斯人ハ皆ナ一定ノ家族ヲ撰ミテ專ラ神明ニ奉
仕シ祭祀ノ事ヲ掌トリテ其職ヲ世襲セシメタリ我カ
基督旧教ノ如キハ更ニ太甚シク僧祝ヲシテ心思ヲ世
俗ノ塵務ニ関知セシメサル而已ナラス妻子ノ繫累ヲ
脫離シニ出家持戒シテ一生ヲ終ラシムルニ至レリ
獨居不娶ノ宗規ハ僧祝ノ數多キニ過キ俗人ノ數却テ
相減スルノ比例ニ應シテ治道ニ害ヲ貽スル甚タ明ラ
カナリト雖モ其ノ理論ハ固ト此一回ノ問題ニ關係ナ
キヲ以テ之ヲ茲ニ論述セス

夫レ吾人カ宗教上ニ於テ苦行難業ヲ貴重スル所以ハ
猶ホ道義上ニ於テ奇節烈操アルヲ尚フカ如ク人情ノ
自然已ム可ラサルモノナルヲ以テ獨居不娶ノ宗規ハ
之ヲ實踐スルニ極メテ難ク其弊ヤ甚タ恐ルヘキ土地
ノ人情ニ最モ適當セリ故ニ歐南諸邦ノ如ク季候温暖
ニシテ情欲發動シ易キ土地ニ在テハ獨居不娶ノ宗教
盛ニ流行スレモ北歐寒冷ノ地ニ於テハ却テ之ヲ見ス
加之人戸稀疎ナル國土ニ之ヲ許容シテ其繁庶ノ土地
ニ許容セス然レモ此論趣ハ不娶ノ宗規ヲ擴充シテ天
下ニ及スノ治圖上ノ得策ニアラサルヲ概言スル而已

ニシテ敢テ專ラ其宗規ヲ攻撃スルニ非サルナリ

第五回 僧侶ノ富ニ制限ヲ加フヘキ法律ノ經畧

ヲ論ス

百姓ノ家族ハ時アリテ斷絶スルヲ免レサレハ其富ヲ
不朽ニ保有スルヲ能ハスト雖モ僧侶ハ永續不斷ノ一
家タルヲ以テ富一タヒ其掌握ニ入ルルハ幾世ヲ經ル
モ再ヒ出ルヲ免シ
又百姓ノ家族ハ世代ヲ經ルニ役ヲ蕃衍スレハ其富モ
亦之ニ應シテ増殖ノ計ヲ爲サ、ルヲ得スト雖モ僧侶
ハ更ニ之ヲ要セサレハ其富ニ制限ヲ加ヘサル可ラサ

ルナリ

僧侶ノ所有物ニ就テハ今日獨リレフヤチカルノ規則
ノ存在スルノミニテ此規則ト雖モ唯タ所有物ノ經畧
ヲ示スニ過キサレハ教會ヲシテ一定ノ限度ヲ超エテ
更ニ財産ヲ得ルヲ許サ、ル制度ニ至テハ古來未タ
曾テ規定スル所アルヲ見サルナリ
僧侶カ財産ヲ得ルニ一定ノ制限無キヲノ非理ニ屬ス
ルハ民心皆ナ之ヲ喜ハス苟クモ曲庇ノ説ヲ立ルモノ
アレハ忽チ狂人ヲ以テ目セルハヲ視テ知ルヘシ
竊慣宿弊ノ中ニモ間々嘉尚スヘキ事ナキニ非サレハ

一朝驟カニ入法ヲ制シテ之カ改革ヲ圖ルキハ幾多ノ
難處其進路ヲ遮ヤルヲ免レサル可シ此際ニハ直接ニ
排撃ノ策ヲ求モンヨリハ寧ロ間接ノ術ニ頼ルヲ以テ
制法者ノ智慮ヲ明示スルニ足レリ其間接ノ術トハ即
チ僧侶積財ノ弊ヲ改ムルニ其得有ヲ驟カニ禁制スル
ト無ク唯タ自ラ之ヲ忌惡スルノ氣風ヲ存スルヤウ誘
掖激勵シ得有ノ權ヲ與ヘテ永世ノ持有權ヲ没入スヘ
シ
歐洲二三ノ邦國ニ於テハ貴族ノ特權ヲ保護スル精神
ヲ以テ若シ寺院ニ財産ヲ寄附スルコトアレハ其ノ死後

ニ相續人ノ情願ニ依リテ之ヲ贖回スルヲ得ヘク或ハ
又國君ニ其幾分ヲ沒收スルノ權理ヲ附與セリカステ
ハ此慣習相行レサルヨリ國中ノ財産ハ殆ト僧侶
ノ攫取スル所トナレバアラジンニハ沒收ノ權存スル
カ故ニ僧侶ノ手ニ入ル所甚タ多ラス佛國ニハ沒收、贖
回ノ二權并ヒ行ル、カ爲ノニ教門ノ所有ニ歸入スル
所更ニ鮮ナシ佛國ノ富饒繁榮ハ殆ト此二權ノ作用ニ
由テ失墜ヤスト謂フモ過言ニアラス果シテ然ラハ在
上者ニ希望スル所ハ唯タ此二權ノ區域ヲ擴充シテ死
後ノ讓產法ヲ廢止スルニ在ルノミ

僧侶ノ所有ノ爲メニ將來ノ財産及ニ必要款ヲ可ラサ
ル所ノ貨財ハ之ヲ保護シテ完全安固決シテ侵ス可
サルモノト制定シテ教會ト齊シク不朽ニ永續セシ
ム而ノ新シニ信徒ノ遺産ヲ襲クヘキノ權理ヲ剝奪スル
ヲ要ス

若シ規則ソノ本意ヲ失シテ循行ノ弊習トナラハ其ノ
規則ヲ破ラシムヘシ若シ循行ノ弊習モ確立シテ規則
ノ效力アラハ其ノ弊習ニ從ハシムヘシ
曾テ羅馬ニテ政府僧侶ノ間ニ爭論ヲ生セシトアリ時
ニ要門書ヲ出シテ曰ク旧約全書ニ何等ノ訓誡アルニ

拘ラス僧侶タルモノハ必ス國費ヲ支給セサルヲ得
トノ一句ヲ記セリ讀者之ヲ評シテ該書ハ大ニ理財ノ
要訣ヲ得タリト謂ヘリ

第六回 禪院ノ論

若シ夫レ遺産相續ノ親戚ナキ等情勢已ムヲ得サルノ
外ニ教會ノ如キ寺院ノ如キ永久不死ノ偽人ニ私人ノ
資財ヲ収買シ其ノ代價トシテ該人畢生ノ間多少ノ年
金ヲ付與スルヲ許容ス可ラサルハ苟クモ痴呆ノ
人ニ非サルヨリハ必ス熟知スル所ナル可シ是レ此等
ノ人ハ自己一生ノ安樂ヲ購フテ自餘人民將來ノ福利

ヲ損害スルモノナレハナリ

第七回 偽義ニ惑溺スル

プラトール言ニ曰ク無神ノ説ヲ立ルモノ及ヒ其説ニ從ハサレ氏神ハ敢テ下界ノ善惡ヲ鑒ミスト信シ又惡業ヲ作ルト雖氏犧牲ヲ供スレハ直チニ其怒ヲ慰ムルヲ得ヘシト思フ人鮮ナカラス此三者ハ其説ニ異同ナキニ非スト雖モ其ノ人心ヲ害スルニ至テハ皆ナ相等シキナリト普氏ノ此言ハ宗教ノ見點ニ於テ古來稀レニ見ルヘキ明理ノ論ト稱シテ可ナリ
夫レ拜神式外面ノ莊嚴ハ國憲民俗ニ密接ノ關係ヲ有

スルモノナレハ貴賤無別ノ理ヲ尚フ處ノ共和邦ニ在テハ苟クモ虚飾外觀ニ馳スル儀式ヲ省畧スル而已ナラス内部ノ信心モ自ラ淡寧無雜ナルヲ以テ其ノ執行スル所ノ宗規教例隨テ簡易質朴ナリ希臘梭倫ノ法規プラトールノ葬礼法後ニ羅馬ニテシヤロ採用スル所ト爲ル及ヒ羅馬スマ

一ノ祭礼式等皆ナ然リ
シヤロ曰ク野禽ノ類及ヒ一日ニ起手落成ミタル盡圖類ハ皆ナ清淨ニシテ以テ神明ニ薦ムヘキ佳品ナリト斯巴尔達人曰ク吾曹ハ始終敬神ノ微悃貫徹シテ間斷ナキヲ欲スルニヨリ尋常ノ物ヲ供獻シ曾テ珍奇得

難キモノヲ薦ノスト

敬神ノ誠意ハ決シテ礼拜ノ美觀ヲ欲スルノ心情ト相
同シカラス故ニ苟クモ神明其人ニ賤視セムル阿堵
物ヲ貴フヲ垂示セサルヨリハ漫ニ金錢ヲ神前ニ擲
ツ可ラス

プラトールノ警語ニ曰ク君子ハ小人ノ苞苴ヲ受クルヲ
愧ッ然ルヲ況ヤ神明ノ正直ニシテ何ソ非礼ノ供献ヲ
享ク可キヤト

名ヲ神明ノ供献ニ藉リテ國計民生ノ要需ヲ人民ヨリ
徴収スルノ宗規ヲ立ツ可ラス、プラトール言ヘルヲアリ

曰ク薦神ノ物ハ清淨潔白、正ニ其ノ人ノ操行ノ如クナ
ルヲ要スト

又華美ナル葬礼ヲ競フヘキ宗規ヲ設ク可ラス夫レ人
ハ固ト全等ノ身ヲ以テ生ラ稟ケシモ浮世ノ情況ニ因
テ貧富貴賤ノ別アルヲ免レス死ハ乃チ再ヒ同等ニ復
スルノ時ナレハ願クハ此時ニ因テ其ノ不平均ヲ調停
シテ物理ノ自然ニ復歸センヲ

第八回 法主ノ論

多數ノ教正ヲ置ク所ノ宗教ニ於テハ必ス其中ノ一人
ヲ撰ミテ法主ト爲シ以テ一宗ノ管長タラシムルハ蓋

シ已ムヲ得サル情勢ナリ立憲政ニ在テハ國中ノ諸族
其懸隔甚シカラス一切ノ権カモ亦タ一人ノ掌握ニ歸
セサルヲ以テ法主管長ノ職ト治國牧民ノ任トハ判然
其區別ナカル可ラスト雖モ專制政ニ至テハ國內ノ諸
權ヲ集メテ一手ニ歸スルノ性質ナルヲ以テ國君ハ政
教ノ二權ヲ摠攬シ全ク一己ノ喜怒ニ任セテ宗教ヲ把
弄スルヲ猶ホ并髦ノ如ク毫モ其ノ國政ニ於ルニ異ナ
ラサル可シ此弊害ヲ抑防センカ爲メニハ聖經神典ノ
如キ人君ノ得テ犯シ能ハサル所ノ基本ヲ確立セサル
可ラス波斯王ハ法主ノ職ヲ兼帶セリ然レモ宗教ノ事

ハ可蘭ノ訓誡ニ由ラサレハ施設スルヲ能ハス支那帝
ハ儒教ノ主宰タリ然レモ其ノ經典ハ億兆人民ノ熟知
スル所ニシテ一舉一動決シテ其ノ主義ニ悖戾スルヲ
得ス抑モ萬衆ノ積威ニ仗リテ教義ヲ撲滅セント欲シ
タル帝王古來其人ニ乏シカラスト雖モ常ニ其功ヲ奏
セス却テ暴焰ノ幾分ヲ挫折シタルヲ見ルノミ

第九回 宗教ノ容忍

此書中予ハ固ヨリ政論家ニテ神學者ニ非ス假ニ身ヲ
神學者流ノ地位ニ置テ考フルモ諸教ヲ容忍シテ彼此
ノ別ヲ立テサルト之ヲ准許スルトハ全ク二様ノ論題

ニ属シテ相同シカラサルヲ領得スヘシ
若シ夫レ人民ノ信心ニ任セテ衆教ヲ容許スルヲ以テ
制法者當ニ務ムヘキ職分ナリトスルハ必ス復タ其
ノ容許ヒル諸教ヲシテ互ニ相容忍セシメ以テ彼此軋
轢ノ患ヲ起ササルヲ要ス何トナレハ一タヒ他ニ虐待
サレタル宗教ハ亦他ヲ虐待スルモノト爲ルハ自然免
ル可ラサルノ道理ナレハ若シ一宗教アリテ偶然容許
ヲ得テ世ニ公行スルニ到レハ必ス曩キニ我ヲ虐待セ
シ所ノ宗教ニ向テ攻撃ヲ試ミルハ恰モ強暴ヲ懲志ス
ルカ如キモノアル可レハナリ

然ルヲ以テ一國ノ法律ハ須ラク衆教ヲ制束シテ以テ
國安ヲ妨害セシメサルニ止ラス必ス復タ彼此相容忍
シテ罅隙ヲ起ササルノ精神ヲ含有セサル可ラス夫レ
帝ニ政府ヲ煩ハササルノ國士ヲ稱シテ守法ノ良民ト
ハ謂フ可ラス必スヤソノ人ニ交リ物ニ接スルニモ又
謹慎身ヲ持セサル可ラス宗教ニ於テモ亦然リ

第十回 同上

凡ソ他國ノ布教ニ熱心スル教義ハ必ス他宗ヲ容忍セ
ス、他宗ヲ容忍スルモノハ弘法ノ念自ラ淡薄ナルカ故
ニ宜シク人法ヲ制定シテ其國既ニ定教アリ人心既ニ

之ニ満足スルカラハ濫ニ他教ノ侵入スルヲ許サ、ルヲ得策ナリトス

然ラハ則チ宗教ノ事ニ就テ政法ノ大主義トスヘキハ若シ新教許否ノ權其國ノ自由ニ屬スル片ハ斷然之ヲ拒絶スヘシ若シ領受セサルヲ得サル片ハ唯タ之ヲ容忍スルノミニテ更ニ勸誘スルヲ要セス

第十一回 宗教ヲ變更スル

國君妄ニ定教ヲ廢滅シ或ハ之カ變更ヲ謀ルニアラハ大害必ス其身ニ加ハリ後日之ヲ悔トモ及ハサル可シ就中專制政ニ在リテ斯ノ如キ輕舉ヨリ起ル所ノ騷亂

ハ其禍更ニ暴政ニ窘ノラレテ發スルモノヨリモ一層ノ猛烈ノ加フ可シ其理何トナレハ一國ノ人民ヲシテ一朝其宗教風俗ヲ變更シ敢テ猶豫セシメサルハ固ヨリ國君カ廟堂ニ坐シテ新教創立ノ制詰ヲ草スルカ如ク容易ノ業ニ非サルヲ以テナリ

旧教ハ國憲ニ多少ノ因縁ヲ有スレモ新教ハ之ナク又旧教ハ其國ノ風土季候ニ相應スレモ新教ハ往々之ニ相反ス加フルニ國民改革ノ法律ヲ悅ハサルヨリ其心自ラ旧立ノ政府ヲ蔑視スルニ至リ從來一教ニ固結セルノ人心忽チ二派ニ分レテ交猜忌ノ念ヲ懷クヲ免レ

ス之ヲ約言スレハ國君ハ此改革ヲ行フカ爲ノニ不良ノ信徒、不良ノ臣民タル國人ヲ得ルノミ

第十二回 刑罰

刑罰ハ畏心ヲ起サシムルノ具ナリ然レモ之ヲ宗教ノ事ニ就テ用フ可ラス宗教ノ範圍中ニハ自ラ内心ヲ責ムルノ刑罰アリ此刑罰ノ作用ハ其身外ニ加フ所ノモノヲ消滅スルニ足ルカ故ニ内外交施用スルハ適マイト心意ノ頑固ヲ増スニ過キサルノミ
宗教ノ勢威甚タ恐ル可ク其ノ希望モ亦甚タ遠大ナルヲ以テ希望、畏懼ノ二情交々人心ヲ衝動スルニ方テハ

如何ニ宰官牧吏カ心カヲ改宗ノトニ竭スト雖人民ハ礼拜ヲ禁止サレタルヲ視テ直チニ官吏暴苛ニシテ手足ヲ措クニ所ナキノ思想ヲ懷キ若シ之ヲ容許スルヲ見レハ政令寛恕ナリト悦服スルカ故ニ政府ニテ宗教ノ礼拜ニ干涉スルモ決シテ治效ヲ奏シ能ハサルナリ

是故ニ心魂ニ大願成就ノ望ヲ懷カシノ或ハ威力ヲ以テ生死ノ大事ニ臨マシムルハ決シテ宗教ヲ攻撃スルノ良策ニ非サルナリ若シ必ス之ニ對シテ勝利ヲ得ント欲セハ先ツ之ヲ懷クルニ恩惠ヲ以テシ之ヲ導クニ

快樂福利ヲ以テシ其ノ教門ニ竭ス所ノ氣焰ヲ撲滅シ
テ再燃ノ虞ナカラシメ、教義ニ偏スル所ノ熱心ヲ融和
シテ冷淡平易ナラシメ而メ后チ諸情欲ノ其心腔ニ來
潮スルニ乘シテ信教ノ念力ヲ不知不覺ノ間ニ渙散セ
シム可シ之ヲ要スルニ宗教ヲ變更スルノ通則ハ漸ク
以テ誘導スル方便ハ之ヲ責罰スルニ優リテ甚ク功績
アリト知ル可シ
約言スレハ刑法ノ效用ハ唯チ事物ヲ摧壞スルニ止マ
リテ其他一モ美果ヲ結ブヲ無シ古今ノ史乘ニ歷々其
徵候アリ

第八回 西班牙、葡萄牙二國ノ宗教監察司ヲ諫ム

ル文詞

葡國ノ首府リスボンニ於テ、去ル斷罪ノ聖日ニ猶太教
ノ信如終ニ十歳ナルヲ火刑ニ處セレトアリケレハ談
宗徒ノ一人、直チニ之ヲ文詞ニ作リテ當時ノ事ヲ記セ
リ其事實明瞭ニシテ十目ノ舉テ視ル所ナレハ予カ辨
解ヲ加フヲ俟タスシテ讀者大ニ悟了スル所アル可シ
記者ノ自ラ言フ所ヲ信スレハ其人ハ外道ヲ奉スト雖
モ毫モ基督教ヲ侮蔑スルノ意ナシ唯チ基督教ヲ奉ス
ル國中ニ時々此慘劇ヲ演出スルヲ除キ去ラサレハ以

テ外道ノ國君ニ基督教ノ信士ヲ虐待スルノ口實ヲ得
セシムルヲ免レサル可キヲ浩嘆スルニ在リ
其文ニ曰ク監察諸君ニ啟ス諸君ハ日本帝カ基督ノ教
徒ヲ慢火ニ投シテ之ヲ焚殺セシメテ聞知シロテ極メ
テ其ノ慘酷ヲ怨ミタルニ非スヤ諛帝若シ此言ヲ聞カ
ハ將ニ荅テ言シ朕カ國中ノ教匪ヲ待遇スルハ恰モ汝
カ基督教外ノ人ヲ待遇スルニ於ルト何ノ異ナル所ア
ラシヤ而メ汝怨言ヲ吐クハ必竟朕ハ汝ノ教徒ヲ誅滅
スルノ威力アレド汝ハ力微ニシテ他ノ宗徒ヲ根絶シ
能ハサルニ憤懣シテ然ルノミ其外教ヲ嫌忌スル点ニ

於テ論スレハ五十步百歩ノ異アルニ過キス
更ニ一步ヲ進メテ切論スレハ諸君ノ殘酷ナルハ迥カ
ニ日本帝ノ上ニ出ツト謂フ可シ何トナレハ諸君ハ惟
タ信心ノ完全ナラサルヲ口實トシテ淵源ヲ基督教ニ
同シクスル所ノ猶太宗徒ヲ捕ヘテ死刑ニ處スルカ故
ナリ抑モ我カ信奉スル宗教ハ太初上帝ノ眷愛ヲ蒙ム
リタルハ諸君ノ能ク知ル所ニシテ爾我思想ノ相岐
ル、所以ハ我ハ今尚ホ神眷止ムナレト信依シ諸君
ハ我徒ヲ謂テ太初ハ神眷ヲ蒙ムリシモ今日ハ乃チ然
ラスト言フニ在ルノミ唯タ此思想ノ相異ナルノ一事

ニ由テ我徒ニ加フルニ猛火利劍ノ極刑ヲ以テストハ
何ノ夫レ残酷ノ太甚シキヤ、太初一タヒ神眷ヲ得タル
ヲ以テ今日ニ至テ尚ホ然リト執信スルハ固トヨリ錯
悞ナシトセサルモ豈ニ之ヲ赦免ス可ラサルノ大罪ト
謂フノ理アラシヤ

諸君ハ我子孫ノ性理ノ大法、萬國公法ニ遵依シテ神明
ト崇視スル本心ヲ枉屈セサルヲ以テ之ヲ火刑ニ處ス
ルナラン諸君ハ己ニ我徒ヲ待スルニ残酷ノ惡名ヲ遁
ル可ラス然ルヲ況ヤ父祖ノ庭訓ヲ守リテ罪ナキ子孫
ニ於テヲヤ其ノ残酷ハ更ニ一層ノ甚シキヲ覺エタリ

諸君ハ回教ニ勝リテ布教傳道ノ善巧方便アルヲ自ラ
放棄セリ何ノヤ諸君ハ彼此信徒ノ衆寡ヲ較計スルニ
遇ヘハ彼ハ專ラ腕力ヲ恃ムニ依リ利劍ヲ用テ布教
ノ具ト為スヲ駁撃スルニ非スヤ然ルニ今火刑ヲ以
テ基督教ヲ維持スルノ機械トスルハ抑モ亦何ノ意ソ
ヤ

諸君カ我徒ニ迫リテ舊教太極ヲ捨テ新教基督ニ就カシム
ルニ方リ若シ我徒ハ諸君カ自ラ正教ト誇示スレ所ノ
淵源ニ溯リテ異論ヲ主張スレハ諸君ハ答ヘテ「基督教
ハ猶太宗ノ後ニ起ルト雖モ神聖不思議ノ應驗アリト

明言シ乃チ異教外道ノ虐待スル所ト為リ間斷ナク苛責ヲ受ケテ百敗屈セス鮮血ヲ犠牲ニシテ今日ノ隆盛ヲ致セシヲ證示セサルハ無シ實ニ其言語ニ違フナカル可シ然ラハ則チ何故ニ今日諸君ハ當時ノ異教外道ノ所業ヲ學ビテ其ノ正教ヲ虐待セルモノヲ以テ之ヲ我徒ニ加フルヤ

全能ナル上帝ハ爾我俱ニ敬ミ事ヲ所ナレハ敢テ冒瀆セス故ニ我徒ハ茲ニ彼ノ人身ニ化現シテ諸君ニ履行スヘキノ正道ヲ垂示セシ基督ヲ援キ來リテ擔言セシ諸君ノ我徒ニ於ケルハ須ラク基督在世間ノ所業ノ如ク

クナラサル可ラス然ルニ諸君ハ我徒ニ望ムニ基督教ノ人々ランヲ以テシ而ノ自己ノ行業ハ全ク之ニ悖戾セリ何ソ人ヲ責ムルニ嚴ニシテ已レヲ處スルニ寛ナルヤ

諸君ノ行業果シテ基督教徒ノ如ク慈善ナル能ハサルモ稍人情ヲ以テ我徒ヲ待遇セヨ苟クモ心裏ニ一点ノ公義ヲ存セハ更ニ宗教ノ助ヲ假ラス神宜ノ垂示ヲ要セサルナリ

若シ天惠優渥ニシテ特リ諸君ニノミ真諦ノ所在ヲ垂示セルナラハ諸君ハ天父ノ殊恩ニ浴スルノ愛子ト謂

アヘシ殊恩ニ浴スルヲ恃ミテ自餘ノ兄弟ノ之ニ浴セ
サルモノヲ憎惡ス之ヲ天父ノ意ヲ體認スト謂テ可ナ
ラシヤ

諸君既ニ真諦ヲ觀シ得タラシニハ必ス之ヲ發揮スヘ
シ何ヲ吝ミテ之ヲ我徒ニ隱秘スルヤ夫レ真諦ノ真諦
タル所以ハ人心ノ悅服ニ外ナラス夫ノ拷掠ヲ用キテ
我徒ニ改宗ヲ強迫スルカ如キハ決シテ正教ノ趣義ニ
アラサルナリ

諸君果シテ賢明ナランカ、毫モ人ヲ欺クコトヲ欲セサル
ノ故ヲ以テ我徒ニ死刑ヲ加フコト無カルヘシ又諸君ノ

歸依スル所ノ耶穌基督果シテ神子タラシメンカ我徒
ハ人ヲ欺カス自ラ欺カス能ク其ノ訓誡ヲ守ルヲ以テ
恩恵ヲ賜ランコトヲ希望スルナリ且我徒ハ確信ス爾我
俱ニ奉仕スル上帝ハ決シテ我徒カ一死ヲ抛ツテ舊教
義ヲ株守シテ新義ニ遷移セサルヲ以テ冥罰ヲ加ヘサ
ル可シ

諸君カ生ヲ稟ル所ノ今日ハ開明ノ昭代ナリ人智煥發
ノ盛世ナリ真教ノ德光、人心ニ洽久、倫常ハ益、脩正セラ
レテ大ニ智德淬勵ノ區域ヲ擴充セルノ時勢ナリ故ニ
若シ今日ニシテ戒慎セス唯タ血氣ニ任セテ舊弊古習

ヲ革新スルヲ無クシハ遂ニ冥頑不靈ノ惡稱ヲ得テ一
國ノ人民ハ在上者ノ暴虐ニ堪ヘス其不幸ハ實ニ名狀
ス可ラサルニ至ラン

諸君若シ我徒ノ衷情ヲ知ラント欲セハ我ハ將ニ明言
セントス諸君ノ我徒ヲ視ルヤ教敵ニアラスシテ恰モ
一身ノ仇人ニ於ルカ如シ以テ諸君ノ信心ノ深厚ナラ
サルヲ見ルニ足レリ何トナレハ宗教ヲ愛重スル人ニ
シテ何ッ斯ノ如キ冥頑不靈ノ行業ニ因テ自ラ教門ニ
羞ヲ貽スノ理アル可ケンヤ

茲ニ諸君ニ告知セサル可ラサルノ一事アリ若シ百世

後史人アリ筆ヲ執テ今日ノ時事ヲ顧ミ其闕明ニ赴

ク景況ヲ記セント欲スレバ奈何ヤン諸君ノ舉動ニ全
ク野蠻ノ陋アルヲ看出スヲアルヲ實ニ諸君ノ行業ハ
一世ノ大辱ニシテ罪ヲ今日ノ人民ニ得ルモノト謂サ
ルヲ得ス

禮之按スルニ當時ノ形勢未タ基督教ノ弊害ヲ明言
スル能ハス故ニ猶太人ノ文ヲ借り来リテ胸中ノ鬱
憤ヲ晴スノミ此文モ恐ラク孟氏ノ作ニシテ名ヲ他
人ニ假ルナラン

第十四回 日本人カ基督教ヲ疾惡セシ所以

日本人、性情頑硬ニシテ移ラサルハ既ニ前ニ論スル
所ノ如シ談國ノ宰官ハ人民ニ基督教ヲ放捨セシムル
ヲ命スルニ方テ信教ノ心極メテ堅固ニシテ破リ易
カラサルヲ視テ基督教ハ人心ノ頑硬ヲ増スモノナリ
ト自信シテ益々危懼ノ思ヲ増セリ抑モ日本法律ノ精神
ハ一点ノ不順從ト雖モ嚴罰ヲ免レ難キニ改宗ノ命令
ヲ得テ尚ホ之ニ抗抵シタルヲ以テ宰官ハ直チニ不順
從ノ罪ヲ罰ス已ニ罰セラレテ尚ホ改メス復タ一層ノ
罪ヲ加ハタリ

日本人ハ刑罰ヲ以テ乃チ國君ニ不敬ヲ加ハタルノ應

報ナリト思ヘリ故ニ信士カ臨終ノ神歌ヲ諷詠スルハ
恰モ國君ニ對シテ大不敬ヲ加フカ如ク又身ヲ宗教ニ
殉死セシ人ニ神聖ノ尊稱ヲ與フハ官吏ヨリ之ヲ視レ
ハ猶ホ反逆ヲ謀ルニ等シキヲ以テ百方力ヲ盡シテ此
極ニ到ルヲ制禁セリ然レバ遂ニ其功驗ナキヨリ官吏
憤怒シ勸解ノ道斷絶ス是ニ於テ堂上ノ刑官ハ法律ヲ
執リ庭下ノ囚徒ハ宗教ヲ守リテ其間ニ一大劇戦ヲ生
セリ

第十五回 傳教ノ一

東洋ノ人民ハ回教ノ徒ヲ除ク外總テ一教ヲ固執セス

信心頗ル淡薄ナリ其ノ外教ノ國內ニ流傳スルヲ悦ハ
サルハ必竟之カ為メ政體ノ變革ヲ招クヲ恐ル、ニ由
レリ日本ノ如キハ國內ニ數派ノ宗教アリ數百年ノ間
國君自ラ教長ノ權ヲ執ルカ故ニ絶テ宗教ニ就テ爭亂
アルヲ聞カス暹羅ノ國情モ亦相同シカルムツクハ
汎々諸教ヲ容忍スルヲ以テ良心ノ煥發ト為シカルク
タリニ於テハ各教皆ナ善良ナリノ一句ヲ法訓ト定
メタリ

然レハ東洋諸國ノ人情斯ノ如キカ故ニ風土大ニ異ナ
リ制度風俗全ク同シカラサル遠國ノ宗教ヲ採リ来リ

之ヲ諛地ニ移レテ真教ノ光輝ヲ放クシハルヲ能ハス
版圖廣大ナル專制國ニ在テハ殊ニ然リトス蓋シ其初
ノ歐人内地ニ入ルアルモ直接ニ君威ニ觸レサル間ハ
之ヲ寛容シ且國民ノ蒙昧不文ナルヨリ歐人ノ學識ニ
由リテ大ニ啟牖スル所アリテ内外ノ人甚ク相和スト
雖ハ布教ノ效稍相顯ル、ヤ否ヤ忽チ爭論ヲ起シ一タ
ビ爭論起レハ利害相關スルノ人之ニ干與セサルヲ免
レハ宗教ノ爭論ノ如キハ其勢甚ク微々ナルモ談政府
ノ要訣タル平穩ヲ破ルニ足レハ禁令ヲ下シテ新教ノ
傳布ヲ停止シ於是新舊二教師ノ舌戰ヲ開キ人民自ラ

新教ヲ嫌忌スルニ至ルナリ

萬法精理卷之廿五終

明治八年十一月廿八日版權免許

繙譯並出版人

何禮之

東京富士見町四丁目十一番地

馬喰町二丁目

島村利助

芝太神宮前三島町

山中市兵衛

日本橋通三丁目

丸家善七

南傳馬町二丁目

穴山篤太郎

發兌
書林